

京都コンサートホール ロビーコンサートVol.6 2月27日(土)1階エントランスホール 公演に寄せて

お話=佐藤 韶・チェリスト

2019年1月から半年かけてフランス・パリで研鑽を積み、帰国後いろいろなお仕事のお話をいただいていた時、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起きました。当初は深く考えていなかつたのですが、2月後半からはどんどん仕事がなくなつていったので「大変なことになるのではないか」と少しづつ覚悟を決めていきました。



佐藤 韶

実際に演奏会をできなかつた期間、僕は意外とポジティブでした。パリで得た体験や課題を思い返して、じっくりとチェロに取り組むことができたと思っています。しかしそれも最初の2、3ヶ月でしたね。そのうちにどこまでが「休み」なのか分からなくなつてしまつて、1ヶ月ほど弾くことをやめました。その間、様々な事柄について思案を巡らせました。例えば「音楽、芸術、文化って何やろう?」、「こんなにたくさん音楽家がいるのに、僕は必要なのかな?」、「コロナが終息した時、何が必要なのかな?」など。根本的なことを考える時間が増えました。

そんな時、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が取り組んでいる「デジタル・コンサートホール」を観ました。マーラーの《交響曲第4番》を室内楽版で取り組んでいたり、奏者の数を減らしてドビュッシーの《牧神の午後の前奏曲》にチャレンジしていました。彼らは編成を小さくした上で、奏者間のディスタンスをじゅうぶん保つて演奏していました。その映像を観て「ああ、これがオーケストラとしての答えの一つなんだ」と思いました。いまできることをやる。今後の自分の活動につながる答えでした。

いま、いろいろな音楽の聴き方がありますが、僕は「ライブ」を大切にしたいと思っています。演奏する場所によってできる表現は異なりますし、空間や音響、お客様によっても違つてきます。お客様が「傾聴してくださつて」という空間があつて初めて「弾いている」という感触を掴めます。「空間」を感じたいのです。

京都コンサートホールのロビーコンサートでは、ソーシャルディスタンスを保つためにお客様は50名限定になりますが、チェロの温かな響きの中で過ごしてもらえる時間を創りたいです。当日は、J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲第5番》、黛敏郎の《BUNRAKU》、そしてソクリマの《ラメンタチオ》などを演奏します。「チェロ」が持つ可能性をさらに広げようとした作品をピックアップしました。多彩で特殊な奏法がたくさん出てくるので、それも楽しんでいただければと思います。

